

「アーユス仏教国際協力ネットワーク」に学ぶ

上 NGO/NPOってなんだ？



にしはら たつや
西原 龍哉

(千葉・天眞寺副住職／アーユススタッフ)

「つながり」から問う

タイの農村に研修旅行に行き帰ってきた友人が、目を輝かせながらこんな話を聞かせてくれました。「なんだか懐かしいんだよね。ホームステイした家でご飯食べているとき、隣の家の人が勝手に入ってきて、一緒にご飯を食べ始めるんだよ。でもそれが自然っていうのかな。僕が近所を散歩していると、手招きして果物出してきて一緒に食べようっていう。何かを独り占めするってことが

ないんだ。子どもの世話だって、自分の子どもじゃなくたって当たり前のようにする。その地域がひとつの家族のようなんだよ」

現在の日本社会のさまざまな問題を考える時、原因として必ずあがってくるのが、「人間関係の希薄さ」、「つながりの欠如」、そして「コミュニティの崩壊」です。青少年のひきこもり問題なら、それは家族間の関係が希薄だからとか、それを埋め合わせるコミュニティも崩壊しているからなどがあがり、中高年男性の自殺の増加に

ついても、それは会社のストレスから孤独に陥ってとか、また男性はコミュニティとのつながりも作るのが苦手だからなどと、やはり同じような原因に行き着きつくのではないのでしょうか。

これらの問題分析が正しいかどうかは別にしても、現代では「つながり」「人間関係」「コミュニティ」は私たちが気になり、考えざるを得ないテーマになっているのは確かです。私の友人も、日頃から無意識のうちに求めている「人間関係の深さ」をタイの農村で触れて、その経験が心に響いているのだと思います。

NGO/NPOとは

冒頭であげた「つながり」「人間関係」「コミュニティ」などのキーワードは、今回このページで紹介するNGO、NPOと呼ばれる団体の多くも大切にして活動しています。

一九九五年に起きた阪神淡路大震災以降、NPOやボランティアという言葉が社会的に認知されました。新潟中越地震の時は、阪神淡路大震災の経験が非常に活かされて、ボランティアのコーディネートはすぐに始まり、効率的な連携プレーが各ボランティアグループの間

に生まれたといえます。また、海外における難民支援、災害支援ではNGOという言葉を目にするようになりました。二〇〇四年末に起きたスマトラ沖大地震でも、多くのNGOと呼ばれるグループが生活物資や医療品を携えて現地に飛んで行ったのは記憶に新しいことです。

このように、日本国内でボランティア活動を行ったり、海外の人とも手をつなぎ困っている人々に支援の手を差し伸べようとする人は近年増えてきています。その中でも、同じ思いや目的、意志を共有して、組織として活動を推進しようとする団体をNGOまたはNPOと呼びます。

とはいえNGO、NPOってよく聞けけれど、何が違うのかなって思われる方もいらっしゃるでしょう。

NPOとは、Non-Profit Organizationの略語で、「非営利組織」と訳されます。組織を経営面から見たときに、利益を配分し利益を追求する営利団体なのか、利益を次の活動のために使い個人の利益に還元しない非営利の組織なのか、つまり営利企業と区別する場合にNPOという言葉を使います。

そしてNGOとは、Non-Governmental Organizationの頭文字を並べた言葉で、一般に「非政府組織」と訳されます。政府に属する組織なのか、もしくは一般市民の

意志によって作られた民間組織かどうか区別する場合に、NGOという言葉を用います。ただし、一般的にはNGOは主に国際協力に携わる団体を指す場合が多く、国内の福祉事業や教育事業などに携わっている団体をNPOと呼ぶことが多いです。

さて、これらのNPO/NGOは、さまざまな社会問題に対峙しながら、その問題を解決するためには、やはり人と人のつながりが大切であり、コミュニティの再構築が重要だと気づいています。それが故に、社会における人と人とのつながりを深め、地域間の助け合いを促進する活動に力をいれるのです。そして国際協力の団体も、海外で経験する人間関係の豊かさをさらに大切にしたい、そして日本に住む私たちへの学びとして伝えようと思ひ活動しています。

仏教に通じる視点

NGO活動では、「共生」という考え方も大切にします。「共生」とは、お互いの違いを受け入れ、共に生きることを意味します。

ひとつの社会は多様な人々によって構成されていますが、現実には、人は自分と違う存在と出会った時にとま

どうことが多いのです。その時に、違いを当たり前^の存在として捉えずに、自分たちと相容れないとする観念は、やがて彼らを自分たちに害を与える存在と認識するようになり「排斥」へと向かいがちです。「違い」というのは、民族とか宗教の違いというだけでなく、もつと目に見えづらい違い、例えば性的に求める性が同性である場合などもあります。多くの人と違う存在、自分と違う文化や考え方や志向を持った人と出会った時に、一方的な視点だけで見ってしまうのは、結局敵を作るだけでしょう。それはとてもバランスの悪い社会を作り、結果として自他ともに不利益しかもたらしません。

「共生」をお釈迦様の言葉に置き換えるならば、「縁起」という言葉で表すことができます。人は一人では存在しえないというのが、縁起の思想が教えてくれることです。共に生きるというのはまさに、共に生かされているということです。出会ったいのちが苦しんでいるから手を差し伸べる、その手の先にあるのは私自身でもあるのです。

縁起は経済の上から見ることも可能です。グローバル化が進むなか、安価な果物や衣料品を手に行ける私たちの生活は、海外でそれらを生産する人々の

いたした僧侶が内なる声に促されて行動に出たのでしよう。

仏教思想を基調に置くユニークなNGO「アーユス仏教国際協力ネットワーク（アーユス）」を設立した茂田真澄も、踏み出したきっかけは出会いでした。

一九七〇年代半ば、インドシナ三国（ベトナム・ラオス・カンボジア）でインドシナ難民が発生しました。当時、タイに行つた僧侶の一人がその現状を目の当たりにし、帰国後に浄土宗東京教区青年会（東京浄青）の若手僧侶を集めて何かを始めようということになったのです。まずは僧服で「救援募金」の幡を立て街頭募金を開始しました。茂田も東京浄青の一人として街頭に立ちましたが、当時はまだカンボジアがどこにあるのかとか、暑い



アーユス理事長・茂田真澄師

生活の上に成り立っていることを自覚しないといけないでしょう。例えば、バナナがこれだけ安く手に入るようになった原因の一つには、フィリピンなどのプランテーションで、安い賃金しか与えられず、しかも大量生産を目指して農業などを大量に使う劣悪な労働環境で働くフィリピンの人たちの存在があるのです。

その状況は無自覚に享受するのではなく、共に生きる道を探る点において、NGO/NPOと仏教者もまた、共に学びあうことは多いと思います。

苦の現実から

NPO/NGO活動は仏教界にも見られるようになりました。お寺に持ち込まれる相談を一緒に考える中で、お寺という場を使って青少年の育成に関する活動をしたり、人身売買から逃げてきた外国人女性がお寺の門を叩いたことからシェルターを始めたお寺もあります。またインドを旅行している時に、貧しいが故に学校に行けず過酷な労働に従事している少年少女に出会い、インドの教育活動を始めたお寺もあります。

それらは、やはり何かのご縁があつて始まったものです。ある他のいのちと出会い、そこに関係する自分を見

気候の国だとも知らずに「寒空の下で子どもが飢えています」と訴えていたといひます。そんな募金活動に賛同して集められた募金をユニセフなどの組織に送ることで、世界貢献をしているという充実感を抱いていたのです。

そして茂田は一九八二年、紛争最中のタイ・カンボジア国境のカオイダン難民キャンプに足を踏み入れました。そこで、テレビからは伝わらない臭い、その中で生きる人々が置かれた状況を目の当たりにし、茂田は大きな衝撃を受けます。目の前で人が死んでいくという現実に対して、自分が何も役に立たない。その時の心境を「自分が情けないと思い、涙が止まらなかった。俺ってだめな人間だなとつくづく思い知った」と語っています。

そこで、何もできない自分に立脚することから始めて、自分にできることは何か真剣に模索し始めました。最初に行ったのがユニセフと協力してブータンの子どもたちの命を救おうということ、ORS（経口補水塩：体が吸収しやすい状態に調合した水）と予防接種の普及事業のため募金活動を開始しました。その際、現地を視察し、健康衛生を中心とした生活状況、健康衛生改善及び近代化政策の状況、現地ユニセフの活動状況、救援物資等の

輸送・配布の実体と利用状況等を綿密に調査しました。

同じ目線の発見

数年を経て、茂田は再度ブータンを訪れました。しかし、そこには今までとはガラッと変わった現実が待っていたのです。突然流入してきた海外からの資本がブータンの経済バランスを崩し、人々の心までお金が蝕んでいました。ほとんどなかったといわれた犯罪が頻繁に起こるようになっており、日本から送ったBHU（保健施設）は一部の人にしか使わせておらず、また募金の一部が軍隊に使われることもあったのです。与えるだけの援助が人々のためになっていないという現実が目の当たりになりました。

結局、自分たちが良いと思っ行ってたことは、豊かな日本人として貧しいアジアやアフリカの人を救うという「持てる者から持たざる者へのモノ・カネの援助」に過ぎず、それは富める者の思いこみだったと茂田は気づいたのです。善意の行動が、手段を間違えば悪い結果を導くこともあるというのは、大きな学びとなりました。

さて、難民キャンプでの活動やブータンの活動をする中で、茂田たちは数多くのNGOスタッフとも出会って

いました。NGOのメンバーは、それぞれの力は小さいものですが、カンボジア難民キャンプにおいても、苦しんでいる人々に寄り添いながら彼らと同じ目線に立って活動をしていました。

現場の最前線で働くNGOスタッフは、海外の現場で現地の人々と対等な関係で協力し合い、学び合いながら信頼関係を築いていき、彼らのニーズに沿った支援活動を行っていたのです。現実に置かれている状況を直視し、苦しんでいる人と本気で交わり、同じ目線からその原因、構造を見極め、すべての人々と共に歩む。そんな姿に茂田は、自分たち僧侶が志向する菩薩行にも通じるものを見ました。また、彼らの方法は仏教の「四諦」にも通じると感じた茂田は、自分たちが願う、必要な人に本当に届く支援活動の実現には、NGOとの協力が不可欠との思いを強くしていったのです。

茂田たちは、心ある優秀なNGOの活動が伸長することとは、現実の苦を担い解決へ向うための大きな力となるという認識のもと、より多くの仏教者と手をつなぎながら、NGOを支援する仕組みづくりに邁進します。そして、アユスの発足に至ったのです。

次回はアユスの活動を中心に、仏教と国際協力につ

いて考えます。

(つづく)

Be Happy 募金 For AIDS!

HIV/AIDSは、いまだに多くの命を奪い、そして多くの家族に多大なる影響を与えています。アユスは、HIVに感染した人たちの命や患者を抱える家族を尊重する活動と、10代20代の若い世代がこれ以上エイズの影響を受けないための予防教育を支えます。

アフリカやアジア、日本国内でのエイズ活動へのご支援ご協力をお願い致します。例えば、1000円集まると南アフリカのエイズ遺児1人の3日分の食料を届けることができます。タイでは体調の悪い感染者への家庭訪問を実施することができます。

特定非営利活動法人 アユス国際協力ネットワーク

〒135-0024 東京都江東区清澄3-4-22

TEL 03-3820-5831 E-mail tokyo@ayus.org

郵便振替：00120-3-711893 口座名アユス